



天気予報  
(今日・明日・明後日)



気象台ホームページ

# 令和3年度

## 適切な水管理に向けて



＜深水管理の実施＞



＜浅水管理で分けつ促進＞



＜溝切り跡を利用した  
登熟期の走り水＞

2021年5月

## 移植後の水管理

- 活着までは、稻体が半分隠れる程度の水深が基本で、**好天の日は浅水(2~3cm程度)**として活着を促進しますが、**低温や強風時にはやや深水(7~10cm程度)**とします。
- 活着後は、**好天時はやや浅水(3~4cm)**で水温・地温上昇を図り、分けつを促進します。
- 入水は、用水温と水田水温の温度差が少ない夜間から早朝に行います。日中における用水のかけ流しは水温を低下させます。**日中は入水を行わず湛水状態を維持**します。

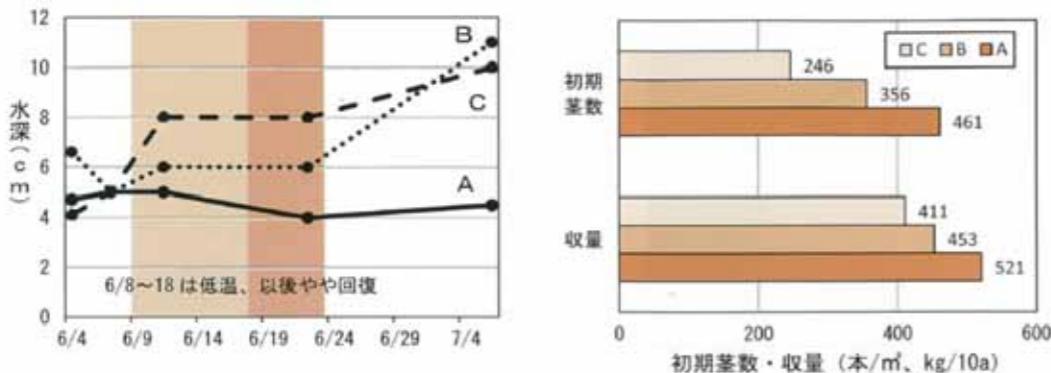


図1 移植後の水管理と初期茎数・収量 (H30. 上川農業改良普及センター調査より)

## 土壤還元対策

- 湛水状態が続くと、**酸素不足で土壤還元(ワキ)**が強まり、根が傷みます。水田の見回り時によく観察し、泡の発生状況をみて適切な対策を実施しましょう。



・暗きよ水こうの開放	・好天が続くときに、中干しを実施
・水の入れ替え	・短期間に終えるため溝切りを併用
具体的な対応策	

図2 土壤還元(ワキ)の診断法と対応策 (北海道農業入門稻作編一部改より)

## 不稔軽減に向けた水管理

### ■ 幼穂形成期を確認しよう

- 主稈の**幼穂長の平均が2mm**になった日が幼穂形成期にあたります。
- 幼穂形成期は不稔軽減に向けた**管理の目安となる重要な起点**になります。
- 品種や栽培条件別に、生育の中庸な地点から主茎を数本採り確認しましょう。



写真1 基部の断面

### ■ 冷害危険期を正確に判断しよう

- 葉耳間長は止葉の葉耳とその下の葉の葉耳との間隔を言います。
- 冷害危険期は葉耳間長が-5cmから+5cmまでの間。
- 全茎の約80%が+5cm以上になったら、深水管理は終了します。

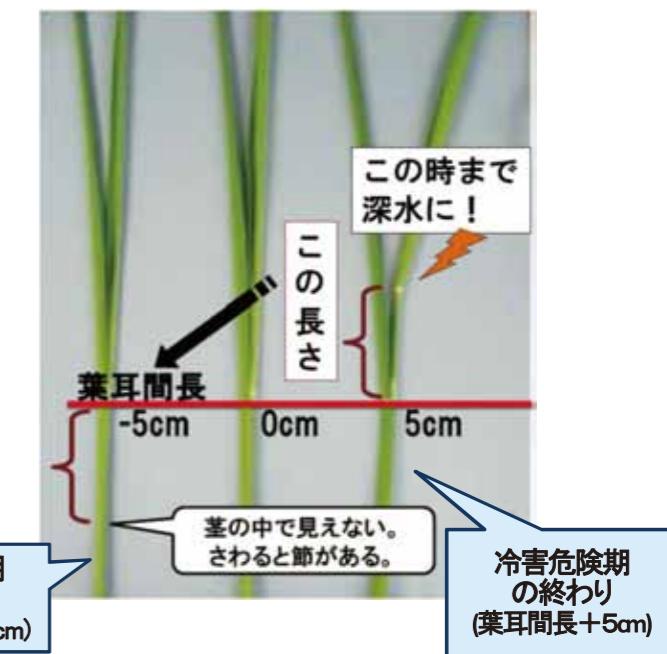


写真2 止葉と止葉前葉の葉耳間長の見方

### 前歴期間

- 幼穂形成期からの10日間が目安
- 徐々に水を深くして10cmの水深に

### 冷害危険期間

- 前歴期間後の7日間が目安
- 幼穂の高さに合わせ徐々に水を深くして、**最大18~20cmの水深**に

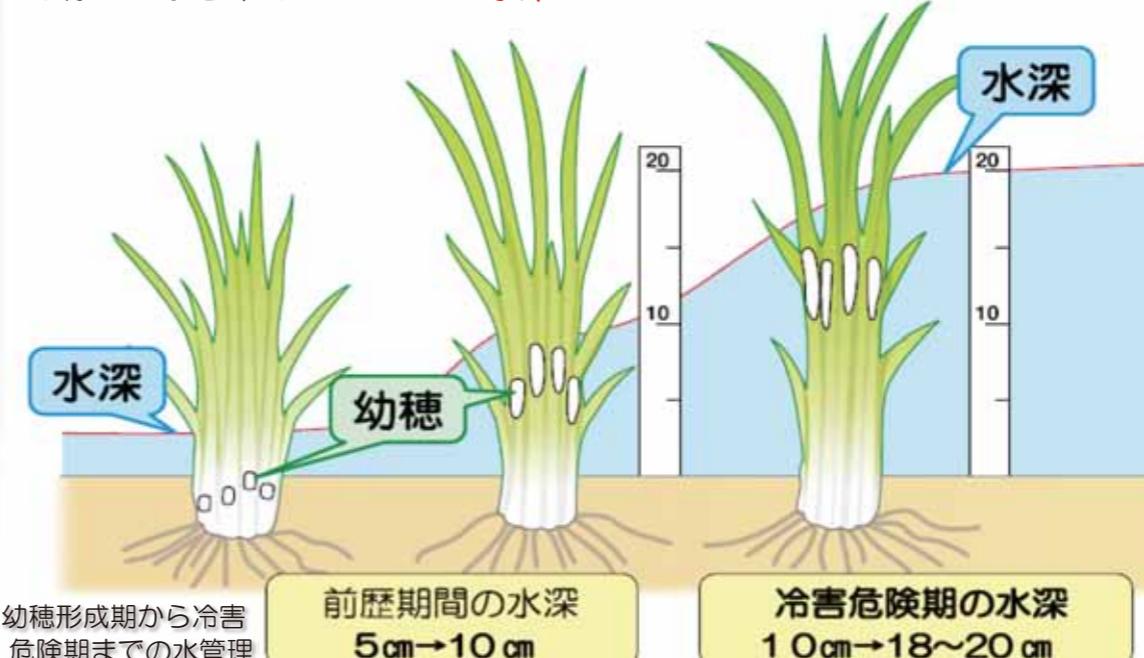


図3 幼穂形成期から冷害危険期までの水管理



写真3 水深測定板

# 出穂期の水管理

危険期終了



出穂・開花始

- 落水し、**中干しを実施**。根に酸素を供給
- 併せて**5~10m間隔で溝切り施工**



写真4 溝はつなげて明渠まで

- 出穂を見つけたら直ちに入水し、**極浅水(ヒタヒタ状態)**に



写真5 速やかに入水

## 登熟期仕上げの水管理

- 落水後の水田土壤の乾き過ぎや土壤表面の大きな亀裂は、収量の低下や腹白粒・乳白粒増加の原因になります。
- 「仕上げの水管理 三箇条」や図4を参考に、適宜走り水を行い、**土壤水分の保持を心掛け**ましょう。

### 仕上げ水管理 三箇条

- 一 出穂が始まったら浅水管理**  
(間断かんがい、走り水の併用も)
- 二 地耐力確保の地固めが原則**  
(土壤表面にわずかに足跡がつく固さ)
- 三 落水は穂かがみ期以降**  
(出穂後25日目以降)

表1 落水時期の目安(平成13年中央農試、上川農試より改編)

土壤水分pF値 (登熟期間)	土壤表面等の状態	収量	品質
2.5以上	作土に深い大亀裂生成、水稻根の切断が観察	×	×
2.4程度	作土に幅1cm位の亀裂多数、足跡つかない	▲	×
2.1~2.3	表面に小亀裂生成、わずかに足跡が付く	○	○
2.1以下	表面のみ乾燥、亀裂微、明瞭に足跡が残る	—	—

(注)○:好適、▲:境界領域、×:不適、—:収穫機械走行に悪影響

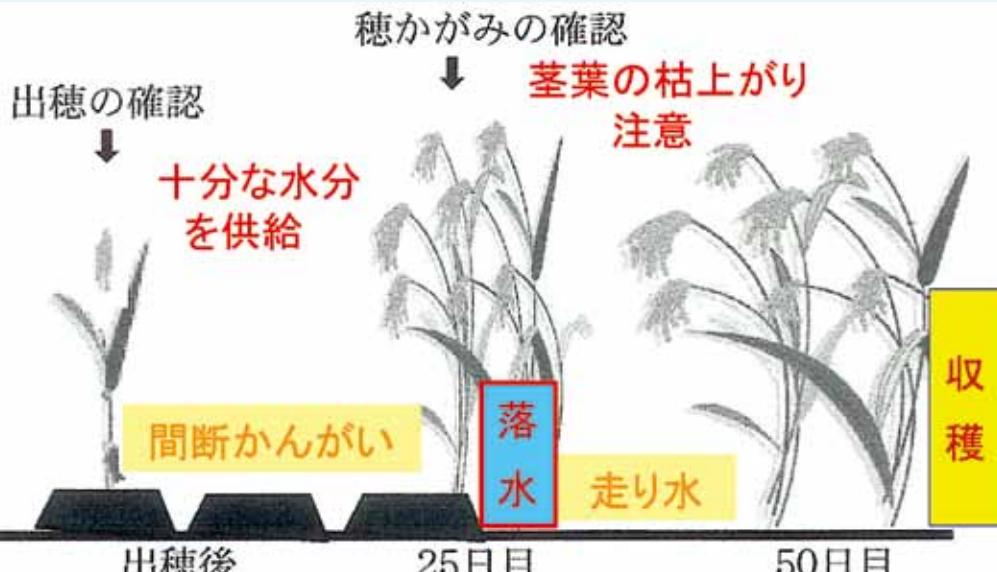


図4 登熟期仕上げの水管理